〔資料紹介・翻刻〕

（山口県文書館蔵）毛利広鎮『類題玉函集　上』

小野美典

徳山藩八代藩主毛利広鎮（ひろしげ）の家集『類題玉函集』〔山口県文書館所蔵〕を翻刻する。本作品は、上下二冊の版本で全三百首の歌を収載している。本稿では解題ならびに上冊の翻刻をおこなう。下冊は稿を改めたい。

・　・

『類題玉函集』は、徳山藩八代藩主毛利広鎮〔安永六年（一七七七）～慶応元年（一八六五）〕の類題私家集である。

徳山藩〔現在の山口県周南市を中心とした一帯〕は、寛永一一年（一六三四）に、萩本藩より四万五千石をもって分知された支藩で、歴代の藩主には、文芸に秀でた者が多い。特に、三代毛利元次は著名で〔注1〕、八代広鎮は本書『類題玉函集』を、またその嗣子九代元蕃は、幕末・維新の動乱の中にあって家集『随風集』を残している。

また、代々の藩主は藩士たちに学問を積極的に奨励した。広鎮の父七代就馴は、天明五年（一七八五）に藩校「鳴鳳館」を設立し、広鎮の時代嘉永五年（一八五二）には、それが「興譲館」と改称され改築されている〔注2〕。この興譲館では、文武両道を兼修させることとなっており、藩主広鎮の好学の程がうかがわれよう。この興譲館の第四代教授桜井武雄（魁園・秋園）は、加茂季鷹門下の松田直兄に和歌を学び、また、近藤芳樹にも師事している〔注3〕。桜井武雄は明治二年（一八六九）に五六歳で没しているが、これは、広鎮が慶応元年（一八六五）に没して四年後のことである。広鎮の周囲に、京都に遊学して和歌を学んだ桜井武雄のような人物がいたことは注意すべきであろう。実際、『類題玉函集』の跋文〔下冊の巻末〕には、藤原宜寸（近藤芳樹）が、次のように記している〔傍線は稿者による。以下同断〕。なお、「兵庫頭大江朝臣の君」とは、「毛利広鎮」のことである。

さきの兵庫頭大江朝臣の君。わかくおは／しまし、ほとより。よみ歌好ませ給ひて。八／十をこえさせたまふまて。月花の情を／空しく過させ給ひし事。一日もあらさ／りしかは。言の葉のかす。かきりもなくおほく／つもれるを。その中より。おもと人たちのぬき／出て。集めおきたりしひとゝちあり。そを此／たひ。かくこなたにて。梓にちりはめしめ／たまへり。〔後略〕

この跋文は、『類題玉函集』の成立状況を端的に示している。広鎮は、八十歳を過ぎるまで毎日和歌を詠んでおり、その中から、「おもと人たち〔側近の者たち〕」が集めたものが本家集である、とい

うのである。この「おもと人たち」に該当する人物の一人として、桜井武雄を想定することも可能かもしれない。また、この桜井武雄を通して、近藤芳樹に歌の推敲・点検の依頼〔注4〕が行った可能性もある。近世後期の山口県の和歌を考えるうえでは、本作は重要な作品と言えよう。

ところで、この『類題玉函集』は、夙に福井久蔵氏によって紹介され〔注5〕、『和歌文学大辞典』〔注6〕で言及、『和歌大辞典』〔注7〕には立項されている歌集である。『和歌大辞典』に簡潔な紹介があるので、以下に、全文を掲載する。

類題玉函集　るいだいぎよくかんしふ　《江戸期類題集》毛利広鎮（徳山侯）の八〇歳までの詠作を類題したもの。安政二1855年刊。四季・恋・雑に部類する。版本二冊。近藤芳樹の跋文がある。

右の『和歌大辞典』では、その刊行年を安政二年（一八五五）〔傍線部〕としている。ところが、『（補訂版）国書総目録』〔注8〕にも『類題玉函集』は立項され、そこでは「成安政五」として、成立は安政五年（一八五八）とされている。それを受けて、『国書人名辞典』〔注9〕の「毛利広鎮」の項でも、「〔著作〕類題玉函集〈安政五〉」と紹介されている。

つまり、『類題玉函集』の成立に関しては、

「安政二年（一八五五）刊行」説（『和歌大辞典』）

「安政五年（一八五八）成立」説（『（補訂版）国書総目録』・『国書人名辞典』）

の二つが存在することになる。また福井氏の著作では、成立年は明記しないものの、「慶応二年（一八六六）上梓」と解せられる言及をしている。

稿者はこの度、『類題玉函集』を調査する機会を得た。そして、管見によれば、その成立は数度の段階を経ており、最終的刊行は慶応二年（一八六六）であると考えられる。その詳細は、別稿〔注10〕を予定しているので、併せて参照していただければ幸いである。

いずれにせよ、本歌集は、近世後期の徳山藩という地方藩主の和歌、ならびにその和歌圏を知るうえで貴重な作品であり、また、近藤芳樹の関与から、近藤芳樹研究においても、注目すべき作品と思われる。

・　・

最後に、書誌を簡単に紹介する。底本は、山口県文書館所蔵の『類題玉函集』（上下二冊）。以下の通りである。

◎『類題玉函集・上』（山口県文書館整理番号・吉田樟堂一二四五）

縦二三・四糎、横一六・〇糎、袋綴、

料紙は楮紙、梔子色表紙の左肩に題箋（刷り題箋）「類題玉函集　上」、

紙数二〇丁（遊紙が巻首に一丁、墨付一九丁）

◎『類題玉函集・下』（山口県文書館整理番号・吉田樟堂一二四六）

縦二三・四糎、横一六・〇糎、袋綴、

料紙は楮紙、梔子色表紙の左肩に題箋（刷り題箋）「類題玉函集　下」、

紙数一九丁（遊紙が巻首に一丁、墨付一八丁）

上・下ともに無刊記、奥書・識語なし。一面九行書き。下巻は和歌本文が一六丁まで。一七丁・一八丁には藤原宜寸（近藤芳樹）の跋文と和歌一首が添えられる。

上巻は、春（四〇首）、夏（四〇首）、秋（八四首）、計一六四首。下巻は、冬（四三首）、恋（三一首）、雑（五三首）、誹諧ふり（九首）、計一三六首。総歌数は三〇〇首である。

なお、『類題玉函集』の翻刻としては、『徳山市史　史料』〔注11〕に、任意に抄出された和歌二百首の翻刻があるが、全文の翻刻は今回が初めてである。本稿では、歌題なども原形をとどめるように留意して全体を翻刻した。

〔注〕

1　渡辺憲司『近世大名文芸圏研究』〔八木書店、平成9年2月〕の「毛利元次文芸圏考」「資料　徳山雑吟」〔二九二～三四〇頁〕に詳しい。

2　大石学編『近世藩制藩校大事典』〔吉川弘文館、平成18年3月〕の「徳山藩」の項〔七八八～七九〇頁、執筆担当は高木俊輔〕、山口縣教育會編『山口縣教育史　上巻』〔山口縣教育會発行、大正14年3月、ただし昭和57年の第一書房の復刻版による〕の第二章十一節「鳴鳳館（興譲館）」の項〔一四二～一五二頁〕を参照。

3　桜井武雄の家集『秋園集』〔矢島作郎編集発行、明治32年8月〕の跋文を参照。また、徳山市史編纂委員会編『徳山市史　上巻』〔徳山市発行、昭和59年1月〕の六三七頁、六五三～六五九頁にも、桜井武雄に関する言及がある。

4　近藤芳樹による『類題玉函集』跋文には、次のように記す。

〔前略〕うつし巻にては。かなの誤。てにをはの違／ひなとも。おのつからありぬへし。とおのれに仰／せて。たゝさしめ。かくはものせさせ給へる／になむ〔後略〕

5　福井久蔵『大日本歌書綜覧　中巻』〔不二書房、昭和2年10月、ただし昭和49年5月の国書刊行会の復刻版による〕、同『諸大名の学術と文芸の研究　下』〔厚生閣、昭和12年5月、ただし昭和51年1月の原書房の復刻版による〕。

6　『和歌文学大辞典』〔明治書院、昭和37年11月、五二八頁〕の中の「諸侯と和歌」の項。執筆担当は山岸徳平。

7　『和歌大辞典』〔明治書院、昭和61年3月、一〇六七～一〇六八頁〕。「類題玉函集」の執筆担当は大取一馬。

8　『補訂版　国書総目録　第八巻』〔岩波書店、平成2年11月、一一七頁〕

9　『国書人名辞典　第四巻』〔岩波書店、平成10年11月、五五四頁〕

10　拙稿「毛利広鎮の『類題玉函集』について―成立年次を中心に―」〔『語文　一三三号』日本大学国文学会編集発行、平成21年3月発行予定〕

11　徳山市史編纂委員会編『徳山市史史料　下巻』〔徳山市発行、昭和43年3月、五二七～五三八頁〕

〔付記〕
本稿を成すにあたって、資料閲覧の便宜をはかってくださり、また、資料翻刻をご承諾くださった「山口県文書館」に、衷心よりお礼申し上げる。

凡例

一、底本を出来る限り忠実に翻刻するようにつとめ、改行も底本通りとした。

一、仮名は、現行の字体に統一した。
一、漢字は、常用漢字表に掲載されるものはその字体を用い、表外漢字は旧字体とした。
一、繰り返し記号（踊り字）は、仮名の一字は「ゝ」、仮名の二字以上は「〳〵」、漢字は「々」で統一した。
一、頁移りを」で区切り、丁数を算用数字、「表・裏」を「オ・ウ」で示した。
一、誤植の想定される歌、やや不審な歌に関しては、注を付して末尾に言及した。
一、各歌の上に、漢数字で歌番号を付した。

類題玉函集上

春

都立春
（一）春にあくる都の空のはつかすみけさより四方に立わたるらん
湖辺立春
（二）春きぬと氷くたけてさゝ浪のうち出のはまにはつかせそ吹
磯若菜
（三）汐かせはのとかになりぬあさ日かけさし出の磯ないさつみてまし
野若菜　」1オ
（四）わかなつななつさひつれてさとのこかつみはやすなり春のの、辺に
初春鶴
（五）まつの雪とくるをみてや白鶴も翅にちよの春をしるらん
滝音知春
（六）雪とけておちくる滝のひゝきにもみやまのおくの春そしらるゝ
春江雪
（七）あしたつのはらふはかせも寒からしなには入江の春の朝しも
暁鶯
（八）ほの〳〵と月さす窓に匂ふかなあけほの告るうくひすのこゑ　」1ウ
門柳
（九）つなきすて駒とゝむるや誰ならんいとをたれたるかとの柳に
雨後柳
（一〇）よひの雨の露そのまゝにあけにけり吹かせもなき青柳の蔭
沖霞
（一一）風はやの名もわすられて沖なりにゆくともみえす霞む舟の帆
霞中瀧
（一二）山ふかみかすみのおくになりはて、春のみおつるみよし野の瀧
浦霞　」2オ
（一三）もしほやくけふりなひきてうらの名の霞となりぬ春の夕なき
禁中花
（一四）大内やま雪こそみゆれ南なる殿のさくらも花咲ぬらし
旅中見花
（一五）樹のもとにたひのやとりをかり衣きつゝなれても花をみるかな
月前花
（一六）春のよのおほろの月のかけふみてたとるもうれし花の下道
山家花
（一七）人とはぬみ山のおくにすめと猶はなのさかりはしつこゝろなし　」2ウ
終日見花
（一八）あしたよりなかめくらせとさくら花猶こそあかね花の夕はえ
花時鞍馬多

(一九)はなさかりむち打つれて出ぬらし馬やに駒の声の聞こえぬ
(二〇)さく花に心うかれてのるこまを春はつなかぬ樹の下もなし
花淵
(二一)樹の下の水のなかれはあさけれとうつろふ花の淵と社なれ
夕雲雀
(二二)夕雲雀あかるかけこそはるかなれ雲の上にや宿もとむらん」3オ
苗代
(二三)ふる雨にまさりし水をまかせつゝ春賑はしきをたの苗代
雨中苗代
(二四)あめふりてをたの苗代ます水に賤か袂のひまをこそ思へ
夕春雨
(二五)くるゝかとおもひし後もたそかれのほと猶なかき春雨の空
旅春雨
(二六)たひやかた春のなかめのさひしさに故郷のみをおもひやりつゝ
江春雨」3ウ
(二七)柳かけいとものとかによりくなり雨のふる江の春の夕波
梨花
(二八)山かけにくれをいそかぬ色なから淋しさみゆる友なしの花
野春月
(二九)むさし野はさらてもはてのなきものを朧にかすむ春のよの月
春月暁静
(三〇)あり明の月もおほろにかたふきてうめよりしらむ春の山まと
春残月
(三一)横雲は花にわかれて山のはのかすみの袖に残る月かけ」4オ
春車
(三二)かすかのやめくる日かけののとけさに花み車の絶るまもなし
山房春事
(三三)山さとは春こそことにのとかなれにほへる花にうくひすの声
春日鷹狩
(三四)春もなほ小鷹すゑのゝかり衣雪かと花のふりかゝりつゝ
島藤
(三五)心あるあまのしわさか藤なみの花をかけたる松かうら島
花藤残猶春
(三六)はなちりてあとは青はとなりなから風猶かをる心地こそすれ」4ウ
春山一路鳥空啼
(三七)花ちれは山ちをかよふ人もなししらぬ小鳥の声計して
暮春残花
(三八)ちり残るこすえの花もみつふたつよむはかりなり春の日数は
暮春鳥
(三九)名にしおはゝよひかへさなん呼子鳥慕へとも猶くれて行春
暮春川
(四〇)よしの川花もなかれてゆく水のはやく春こそくれ果にけれ」5オ
夏
首夏朝露
(四一)花の露けさはわかはにおきかへてみとりすゝしき夏は立けり
首夏川
(四二)夏きても春のなこりの大ゐ川せゝに残れる花のしからみ
花春如昨日
(四三)なつ衣かせまつころとなりにけり花みし春は昨日とおもふに
葵

(四四)かも山に生ふるあふひのいかなれはいくよかけても二はなるらん」5ウ
山家水鶏
(四五)うくひすの昨日か鳴しさくら戸をたゝく水鶏におとろかれつゝ
籠中蛍
(四六)このうちにこめられなから夏むしのもゆるおもひはきえかてにして
古宅橘
(四七)野となりし庭訪ひくれはおのれのみむかしなからににほふたち花
照射
(四八)ともしするほかけうつろふわか葉をも紅葉とみてや鹿のよるらん
杜郭公　」6オ
(四九)めつらしなわかはかくれにほとゝきすしのひ音なからかたらひのもり
岡杜鳥
(五〇)ほとゝきすおのか五月の空なるをなとてしのふのをかになくらん
峯杜鳥
(五一)さとゝほく声にほはせて月かけのいさよふみねになくほとゝきす
古寺杜鳥
(五二)ほとゝきすむかしのよをやしたふらん立花寺のにはになくなり
杜鳥声老
(五三)なく声もいまそふりぬるほとゝきす老のねさめのともときく間に」6ウ
笋成竹
(五四)たけのこの一よ二よとたちのひていつかみとりのわかはさすまと
新竹
(五五)ことし生の竹の若はのみとりにもちよへむ色はあらはれにけり
山家五月雨
(五六)わか山のまきの梢にゐる雲のかさなるまゝに五月雨そふる
連日五月雨
(五七)いく日かす雲の八重ふきはれやらてふりにふるやの五月雨の空
沢五月雨　」7オ
(五八)まこも草かる袂さへほしやらて日をふる沢のさみたれのころ
五月雨の雲の水泳
(五九)五月雨のをやみもやらす日をふれは雲の水泳こそ空にしらるれ〔注A〕
移竹
(六〇)くれ竹をけふは庭にそうゑにけるちよもかはらぬ友とちきりて
禁中夏月
(六一)夏のよも月をすゝしみ萩の戸は花さく秋のこゝちこそせめ
夏月涼
(六二)手にならすあふきに似たる月とてやまちとる袖もすゝしかるらん」7ウ
夏草
(六三)やとちかくかよひなれたる野ちもけさまよふはかりにしける夏草
風前夏草
(六四)雨はるゝのへの夏草ふくかせになひくみとりの色もすゝしき
山雲夏繁
(六五)やまのはにいつもみなれし雲なれと夏はあやしく立そかさなる
氷室
(六六)けふこゝにちよのためしとひのおもの松か崎よりたてまつるなり
夕立　」8オ
(六七)このさとは中々あつしかきくもりなる神きほふよその夕立
夕立過
(六八)夕たちの過つるあとはあつさをもあらひなかせる心地こそすれ
(六九)こく舟の苫おほふまもなみの上をはや過わたる夕たちのあめ

船納涼
（七〇）いさゝらはなには入江のとまり舟すゝしき月のさすにまかせん
蓮
（七一）みつ清き池のはちすの咲そめてさゝなみにほふ花のすゝしさ
夕顔
（七二）白妙にかきの夕かほ咲にけりこゝろしてたけ賤かかやり火
涼風入簾
（七三）なつなからをす吹いるゝ夕かせは秋を隔てぬこゝちこそすれ
夏夜
（七四）はしゐしてかせまちをれは灯し火のまたゝくうちにさよ更にけり
夏莚
（七五）しきてみよ竹もておれるあや莚あつさもしらすふしよかるへく
夏江
（七六）すゝしさになにはおもはすなには江のあしのは戦く水の夕かせ〔注B〕
夏牛
（七七）夏の日のあつさいとはてあけまきかひゝをやうしとおもふなるらし
夏日水村訪友
（七八）川そひのさとひぬ竹のあみ戸かないさ訪ひてまし涼みかてらに
六月祓
（七九）いまよりはうき事きかしみゝと川みのつみとかもなつはらひして
（八〇）すみの江にけふみそきするもろ人はまつのちとせをへなんとそおもふ
秋
立秋風
（八一）あふきさへけさはわすれて白妙の袖にまちとる秋の初かせ
野立秋
（八二）野守さへおとろきぬらしよをこめて小萩なひかす秋のはつかせ
立秋田
（八三）ゆたかなる秋立色をけさみせて田つらのわせもほに出にけり
雨後初秋
（八四）よひの雨にあつさやあらひなかしけんあかつき涼し秋のはつかせ
泉辺初秋
（八五）昨日けふすゝしさいとゝまし水を結ふ手にこそあきのしらるれ
岡早秋
（八六）かねてより月にこゝろはひかれけりまゆみのをかに秋をむかへて
早秋荻
（八七）まつにふくおともかはるを荻ひとりわれは顔なる秋のはつかせ
新涼焼火
（八八）秋来ぬとめにさへみえてさよふかくちるもすゝしき灯火のかけ
残暑
（八九）秋来ても残るあつさに荻のはもあふきのかせをからんとやおもふ
野外七夕
（九〇）あまの川またふたゝひはあふ事のかたのにほしのなと契けん
江七夕
（九一）なには江のなみにうつしていさやみんあしの一よのほし合のかけ
禁中七夕
（九二）たなはたにこよひ手向るともし火のひかりも清し玉しきの庭
野女郎花
（九三）女郎花たかねまくらにむすひけん花をれふして野へにみゆるは

稲妻

(九四)うゑし田もはやほに出ていなつまのうつろふみれは驚かれつゝ

三日月

(九五)みかつきのほそきかけさへ時めきて秋のひかりは空にみえけり

弓張月

(九六)もちにみんかけをしまては山のはにいるもうれしき弓はりの月

八月十五夜

(九七)うき雲はひかりにきえてなにおへる空とはしるし望月のかけ」11ウ

停于月

(九八)中空にめくれる月のとまるかとみゆはかりにもすめる月かな

潟月

(九九)とほひかたさやかにてらす月影を舟さしよせて詠るやたれ

河辺月

(一〇〇)月清みさらせる布とみるまてに一すちしろし秋の川みつ

旅泊月

(一〇一)ゆふへ〳〵かはるうきねの浪の上に影さたまらぬ月をみる哉

田家月

(一〇二)たみのもる門田の月そさやかなるいなはの雲は立騒けとも」12オ

老後見月

(一〇三)あかすみるわか身そいたくふりにける月はかはらす照まされとも

野宿見月

(一〇四)秋の丶のを花かもとの草の庵にこよひの月とあひ舎りして

野月

(一〇五)いかにして家つとにせん秋の丶にをることかたき月のかつらを

関路月

(一〇六)月かけの清みか関は人のみか雲の往来もまもるなるらし」12ウ

浜月

(一〇七)しもかともおもふはかりに月かけの白く照らせるあり明の浜

観月

(一〇八)空はれてみちぬる月のかけをこそこなき玉とめつへかりけれ

羇旅月

(一〇九)草まくらともなひ来つる月かけのいるを幾よかみおくりにけん

月移水

(一一〇)月かけのさなからみつにうつれるを池にも空のあるかとそみる

山家月

(一一一)訪ふ人もいまはなきよの山まとに月と我のみのこりてそすむ」13オ

神代月

(一一二)いまも猶あふけは高きひかりかなかみよのままの月のみかけを

橋辺月

(一一三)さやかなる月にうかれておもふとちいつわたりけん里の川はし

旅月

(一一四)なもしらぬ山のふもとにやとるよはおもはぬかたにいつる月かな

古寺暁月

(一一五)はつせやまあかつきつくるかねの音に月も西へとかたふきにけり」13ウ

月前松風

(一一六)更ゆくか月みる人もしつまりてひとり声する軒のまつかせ

老見月

(一一七)としなみの八十にあまる老かめにかすまてうかふ秋のよの月

老後惜月

(一一八)老か身のほとをおもひて月みれはかたふく影のをしくも有哉

秋夕

（一一九）よをすてしわれなりなから何となく秋のゆふへはものうかりけり

山中秋夕

（一二〇）さらぬたに秋のゆふへはかなしきを軒はの山に鹿もなくなり　」14オ

秋野夕帰

（一二一）秋草の花の野末にあこかれてかへるゆふへのみちのはるけさ

小鷹狩

（一二二）秋ひと日小たかあはせて得し鳥のもすのゝくれにかへる狩人

葛風

（一二三）吹かへすまくすかはらの秋かせに虫もよさむをうらみてやなく

葛葉散風

（一二四）秋かせにうらみなからもくすのはのこゝろよわくやかつちりぬらん

雨夜虫　」14ウ

（一二五）あはれなりよふかき雨にふり出てぬれつゝきほふすゝむしのこゑ

山家虫

（一二六）山さとは訪ひ来る人もなかきよにたれまつ虫のなきあかす覧

虫声非一

（一二七）よもすからおのかさま〳〵なく虫もあはれひとつの外のねやある

促織

（一二八）秋のゝのちくさの花のねをははた織むしやおりいてにけむ〔注C〕

蟋蟀

（一二九）かへになくこほろきの声さよ更ていとゝ枕にかゝるつゆしも　」15オ

閑庭露

（一三〇）かり捨ぬ庭のあさちか露の上にやとれる月の影の淋しさ

菊盛久

（一三一）霜を経ていとゝ色かをまさ垣にさかりうれしきしら菊の花

暮菊

（一三二）きくの花なほうつろはぬものならはくれ行春も忘れてやみん〔注D〕

重陽

（一三三）たのしくも酔にけるかなけふの日の数をかさぬるきくのさかつき

十日菊　」15ウ

（一三四）昨日みし花の色かにあかてこそけふもめくらせ菊のさかつき

峰紅葉

（一三五）夕からすくるゝみ谷に声すなりみねのもみち葉またあかぬまに

山紅葉

（一三六）をくら山をくらくみゆるかけもなし夕日てりそふ木々の紅葉に

紅葉色深

（一三七）花ならはうつらむものを霜おけはいとゝ色ます秋のもみちは

紅葉如酔

（一三八）秋ふかき霜のなさけにもみちはの酔るかことく満にけるかな　」16オ

山深紅葉残

（一三九）人訪はぬみやまのおくのもみちはゝ風もしらてや吹残すらん

蔦

（一四〇）かくれかのかきねの蔦も紅葉して人めにかゝるころと成けり

朝暮初雁

（一四一）夕かけてくる鴈かねはけさ聞し声よりも猶あはれ成けり

湊初雁

（一四二）みなと江の秋かせ寒き夕なみに声うち添へてわたる初雁

蘆辺雁　」16ウ

（一四三）おく露のたま江のあしを吹かせにみたれておつるかりのひとつら

月前鴈

（一四四）大江山月かけさえてはつかりの鳥羽たの面に鳴わたるみゆ

左右聞鴈

（一四五）おとは山こゆとみるまに天つかりきたの、かたに声の聞ゆる

砧

（一四六）たか為のきぬたなるらんきくま、にあはれうちそふ暁の声

名所擣衣

（一四七）やまとりのをのへのさとに賤の女かなかきよすからころもうつなり」17オ

（一四八）よさむにもなりにけらしな賤の女か衣して打秋しの、里

鹿声遠近

（一四九）わか庵のかきねまちかくきけはまた遠山辺にも鹿の鳴なり

寝覚聞鹿

（一五〇）山さとのあはれや何と人問は、ね覚の鹿の声とこたへん

海辺聞鹿声

（一五一）うきねする浪にあはれをうちそへてうら島近くを鹿なくなり

閉門野鹿近

（一五二）草の門はさしもさ、すもこえいりて庭をものへと鹿のなくなり」17ウ

渡霧

（一五三）きりふかみよとのあさけはをくらきによふねのほすと猶おもふなり

山家秋興

（一五四）とふ人のなき山すみもさひしさのなくさまるゝか菊にもみちに

秋旅

（一五五）そのはらやふせやといへと秋のよのものうき旅はいこそねられね

秋燈

（一五六）あきのよはとひいる虫もまれなれはふみ見のこさぬ窓のともし火」18オ

秋海

（一五七）わたのはら秋の色にはそまねともゆふなみよする音そ淋しき

秋水

（一五八）むすひつる手もひや、かにおほしけりや、秋ふかき山のゐのみつ

秋田

（一五九）おしねかるあきの田向のにきはひにとしのゆたけきほともみえけり

秋川

（一六〇）かつら川おちくる鮎のやなやれてなみまさひしく秋かせそふく

秋山

（一六一）もみちはをみねにふもとにそめかけて山にそあきの色はみえける」18ウ

秋時雨

（一六二）秋ふかみはやく時雨のふる山はもみちの色やいやまさるらむ

江天晩秋図

（一六三）あきくれてうすすみのえの空とほくわたるかかりのもしもほのかに

山寺暮秋

（一六四）山寺はさらてもものゝさひしきを秋つきはつる入あひのかね」19オ

〔注〕

A　五九番歌。歌題・四句の「水泳」はママ。

B　七六番歌。四句「あしのは戦く」はママ。

C　一二八番歌。歌題「促織」は「はたおり」。四句「はた」の欠か、或いは「織」一字で「はたおり」と読むか。正しくは「秋の野の一千草の花の一ねをばはた一はたおり虫や一織り出でにけむ」であろう。

D　一三二番歌。四句「くれ行春」はママ。「くれ行秋」か。

（おの・よしのり）